学園伝

LOST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園伝

【Ｎコード】
Ｎ９５１９Ｆ

【作者名】
ＬＯＳＴ

【あらすじ】
とある時代、とある大陸、その大陸にはモンスターが住み着いていた。そして、そのモンスターの頂点に立つ魔王。その魔王を勇者とその仲間たちが打ち破った。世界には、少し強い大人なら簡単に倒せるモンスターしかいなくなった。しかし…

プロローグ

とある時代、とある大陸、その大陸にはモンスターが住み着いていた。
そして、そのモンスターの頂点に立つ魔王。その魔王を勇者とその仲間たちが打ち破った。
世界には、少し強い大人なら簡単に倒せるモンスターしかいなくなった。しかし…

第1話：始まりの学園（前書き）

こんにちは！ロストです！まだまだ、初心者ですがどうか見捨てずにいてください。

第1話：始まりの学園

魔王が倒されてから数千年後の世界。数千年経っても魔王の恐ろしさは、人に語り継がれていた。
人々は魔王がいつか、甦り再び数万ものモンスターを引き連れて人々を恐怖のどん底に陥れると思っていた。そして、人々は考えに考え抜いて1つの答えを導き出した。
『魔王が復活しても、倒せばいいんじゃない？』と。そして、魔王を倒す人を探し出すためだけに、建設された、学園…『エント学園』
これはその1人の少年の話である。

？？？「はぁはぁはぁ…」
少年は走っていた。
？？？「はぁはぁはぁ…」
黒い制服をまとい、黒い髪は、ショートなので、後ろ髪が少し靡いてる。
？？？「はぁはぁはぁ…」
腰には、左右にそれぞれ、持ち手が金と銀の短剣が専用のホルダーに入っていた。
？？？「くっそー、入学式にいきなり遅刻してたまるかー！」
そう、この少年……中学一年生にこの春なった、シンは折角必死こいて入学した、学校に早速
遅刻しそうだったのだ。
シン「校門が見えた！」
シンは時計を見る。残り時間は後三分。しかし…
どさっ！
シン「ん？なんだ？」

木の方で、何かが落ちた音が聞こえたので、シンは時間がないのにもかかわらず、好奇心が働いてしまい、ついつい、音がした方へ行ってみた。すると…
???「うー痛いよぉ」
狼の耳と尻尾と牙がある少女が足首を擦っていた。
シン「人狼族？」
そう、この世界にはシンのような剣士族や目の前にいる人狼族等さまざまな種族がいて、国を持ち、ときには対立、ときには協力して生きている。
シン「大丈夫？君、新入生だよね？」
シンは手を差し伸べる。
???「そうですけど…あなたは誰？」
顔をあげるとかなりの美少女だった。
シン「えーと、僕は新入生のシンっていうんだけど……ほら、ネクタイが赤でしょ？」
ロナ「本当だ…ボクはロナっていうんだ♪」
ちなみに男子ならネクタイ、女子ならリボンと色がついていて、学年がわかる仕組みになっている。
シン「で…どうしたの？あっやばっ！入学式はじまってる。」
シンが時計をちらりと見て言う。
ロナ「そんなぁ…早く行こう！っ痛！」
ロナは立ち上がろうとしたがすぐに倒れてしまった。どうやら捻挫のようだ。
シン「とりあえず、保健室に行こう。」
ロナ「でも、ボク…わっ！」
シンはロナをお姫様抱っこして、すでに保健室に向かって走っていた。
ロナ「わわ！恥ずかしいじゃん！ていうか場所知ってるの？」
シン「どっちも大丈夫！今、入学式で多分誰もいないし、場所は学園説明会の日に配られたじゃん。」

ロナ「多分って…」
そう言うロナの顔は真っ赤だった。

その頃体育館
教頭っぽい人「であるからして我が学校では……」
超広い体育館には軽く一万人はいるというのにまだ半分しか埋まっていなく、そして壁にはガラス張りの部屋があり、かなり豪華になってい、その中に数人の豪勢な服を身にまとった人達がいた。さらに、その中の一人…人狼族の男が落ち着きなく指を机にトントンとぶつけていた。
???「どうした？人狼王」
人狼王「我が娘が姿を見せんのだ。暗黒王何か知らぬか？」
暗黒王「人狼王の娘……ああ！あの元気はつらつ娘か！今頃迷子にでも…」
人狼王「十分ありえるな。」

保健室
ロナ「はっくしゅ！」
シン「大丈夫か？」
ロナ「誰かにうわさされてるのかなー？」
シンは保健室にロナを連れてきて、只今ロナは手当て中である。
保険の先生「これで、大丈夫よ。もう、入学式には間に合わないか

らクラスに直接行きなさい。えっと、シン君とロナちゃんは…」
そう言って、保健の先生（以下保先）は名簿っぽいものをペラペラめくって二人の名前を探していた。
保先「あったあった。二人とも一年B組よ。行ってらっしゃーい♪」
そして、二人は歩いて教室にむかって行った。

第1話：始まりの学園（後書き）

ふぅー疲れた。他の作者様の作品に憧れて、小説家になって小説を作ろうと、思ったのですが、かなり大変ですね、これからはキャラクターをとりあえず増やしていこうと思っていますので、本格的な戦闘はもうちょっと先になりそうです。

第２話：神速のＣａＴ（前書き）

こんにちは（？）ロストです！遂に第２話です。今回も全然、駄目ですが、是非目だけでも通してください。

第２話：神速のＣａＴ

ガラガラ…
シンとロナが１ーＢのドアを開けた時、クラスの９割が一斉に視線を向けた。
シン「あのー実は…」
担任っぽい先生「あー保健の先生から、校内電話で聞いているから、大丈夫よ。席は適当でＯＫよ。」
担任っぽい眼鏡をかけた先生にそう言われ、シンは一番奥の窓際へ向かった…が
シン「おい、何でついてくる？」
ロナ「えー！いーじゃん！自由だし♪」
シン「♪じゃない！もういい勝手にしてくれ。」
そしてロナはシンの隣に座った。
アン「で、話が途切れちゃったけど、私はあなた達の担任を務めるアンです。で、１人ずつ自己紹介していってね♪あと、自分が使う武器も。」
そして、自己紹介が始まった。
剣士族のクラスメイト「剣士族のショウです。使う武器は太刀です。」
……

そして、隣に座っているロナの番になった。
ロナ「人狼族のロナです。使う武器はグローブです。」
ちなみに、人狼族はだいたい体術を使う人（？）が多い。
そして、シンの番になった。
シン「剣士族のシンです。使う武器は双剣です。」
剣士族はその名の通り、短剣、片手剣、大剣、銃剣　ｅｔｃ．

とりあえず剣とつくものは大抵使える。
アン「じゃシン君で最後ね♪それじゃ次に授業について……」

キーンコーンカーンコーン
放課後
ロナ「それじゃバイバーイ！また明日。」
シン「うん。また明日。」
いろいろあったけど、親の反対を押し切ってまで入学したかいがあったと思ったシンだった。

この学園は学園自体が巨大すぎて国のようになっている。校門はあるが、家やら店なども一応学園の一部なので、校門と言うかはわからない。
そして、シンはまだ昼ちょっと過ぎなので、学園内を散歩していた。

渡り廊下
カンッ！カンッ！
シン「この音は！？校舎裏か！」
シンはまたもや好奇心で音がした方向へ向かった。幸いここは一階渡り廊下なので、外と繋がっていて、すぐに向かうことができた。

校舎裏
不良Ａ「はっ！さっさと降参したらどうだ！」
不良Ｂ「君、かわいいから特別に許してやってもいいよぉ！」
？？？「誰が、このぉ！」
シンが着くとそこには、悪魔族と剣士族の不良が猫人族の女の子を襲っていた。
不良Ａ「ほらほらほらほら！もう、終わりか！」
Ａの剣士族は長剣を、Ｂの悪魔族はハンマーを使っていて、猫人族

の女の子はトンファーを使っていた。
シン「あの、二人のネクタイ……上級生か！あの女の子…確かクラスにいたなぁ、名前はニィ！」
シンはニィに加勢しようとしたが途中、違和感を感じ、止まった。
シン「あの子…手加減してる？そんな訳ないか…」
シンは再び走った。
不良Ｂ「くらうんだな！」
ニィを壁際まで追い込み、悪魔族の不良がハンマー振り下ろした時、不良の目の前からニィの姿が消え、ハンマーは空気を叩き壁を砕いた。そして、その男の右側の少しむこうに屈んでニィをお姫様抱っこの体制で止まっているシンがいた。
シン「大丈夫？加勢するよ！」
ニィ「はぁ？何言ってんの？これくら…」
シン「大丈夫。役割分担しよう。僕が剣士族を、君は悪魔族の不良を頼むよ。」
ニィ「だーかーらー！わた…」
シンは一度、ニィの言葉を遮り、自分の案を言ってさっさと剣士族の不良のもとへ行ってしまった。
不良Ｂ「くらうんだな！」
悪魔族の不良はハンマーを振り下ろしてきたが、
ニィ「ふぅ…今、ちょっといらついてるのよねぇ。」
ニィがため息をつき、殺気混じりの言葉を言った瞬間、悪魔族のハンマーは砕け散り、本体は何か所にも痣がついていて、ドォンと倒れた。
もともと、猫人族は素早さが高く剣士族の短剣や双剣も猫人族の十八番を伝授してもらったのだ。だが、今の素早さは並ではなかった。

校舎裏（ニィとは離れている場所）
カン！キン！カーン！大きな音が発生し、不良が倒れていた。

不良A「つ、強ぇ」
最初、不良は三つの点から手加減しても負けないと思っていた。
1つ、相手が後輩だということ
2つ、リーチの差
3つ、相手の武器が短剣2本だけだと思っていたこと。
いきなり、2本の短剣を時間差で投げた時は、驚いて、一本が太ももに刺さり血が出てきたが、相手が丸腰だと思い勝利を確信し、長剣を大きく振り上げたとき、懐から、シンは短剣を2本取り出し、
シン「はぁぁぁ！」
と叫びジャンプし、長剣をはじいた。
不良A「ま、まいった。すまねぇ、謝るからゆる…ぐはぁ！」
シンは不良の腹に思いっきりグーパンチをし、気絶さして、その場を去った。

校舎裏（もといた場所）
シンが走ってもとの場所に戻ると、すごく不機嫌そうな顔をして、近くにあったベンチにすわっていた。改めて近くで見ると、髪は、セミロングで茶色で胸はつるぺただが、ロナと同じくらい美少女であった。しかし、シンはそれ以上に驚いていた。
シン「も、もしかして、あの不良を倒したの？」
ニィ「見たら、わかるでしょ？」
そう言って、ニィは倒れている不良を指差した。
シン「よ、容赦ないね…」
ニィ「ま、あのクズもストレス発散には役立ったわね。そ…それと…あの…」
シン「どうかしたの？どっか怪我した？」
ニィ「そうじゃないけど……その…何でもない！このバカ！」
シン「痛っ！」
そう言って、ニィはシンに向かって一発蹴りを入れて顔を真っ赤に

して帰ってしまった。
シン「何だったんだろ？」

翌日、シンの左の席に座って、何となく…何となく座ってるだけなんだからね！と顔を真っ赤にしながらどこか嬉しそうな顔でシンに怒鳴るニィがいたのはまた、別の話。

第２話：神速のＣａＴ（後書き）

今回のお話どうでしたか？楽しんでいただけたのなら幸いです。前回書き忘れてしまいましたが、感想もいつでも募集してます。もうちょっとこうしたらよくなるよ、とか出直してこい素人が！とか無いとは思いますが、ここが良かった、面白かった等々お願いします。それとパソコンの調子が悪くなり、誰も待ってないと思いますが、３話は少し先になりそうです。

第３話：微笑のＡｎｇｅＬ（前書き）

こんにちは（？）ロストです！待ってないでしょうが、第３話です！

第3話：微笑のＡｎｇｅＬ

その日も、学園での授業は終わり、帰りのＨＲの時間になっていた。
アン「…えーと、後は…そうそうもう少しで、討伐演習に向かいます。向こうでいろいろもめないように、今のうちにパーティを決めておいてくださーい。では！起立！礼！」
一同「有難うございましたー！」
ちなみに、最近は強いモンスターも出てきていて、許可書、又は特別に許可されている証を全員が持っているのならパーティを組んでもいいという、規則が作られた。許可書というのも、この学園だけではなく、どの国でも、試験さえ通れば入手することができる。逆にこれがなければ、例え魔王を小指で倒せる程の力を持っていても、スライム（一番弱い）を倒しても犯罪者ということだ。
シン「はぁー終わった、終わった。」
ロナ「ねぇーシン！討伐演習、ボクと組も！」
シン「んー？別にいいよ。」
ロナ「やったー！」
ＨＲが終わった瞬間、右側にいる、ロナにパーティに誘われ、それをＯＫすると手を挙げて喜んでいた。
ニィ「ちょっとシン。ロナだけじゃ役不足だから、私もついて行ってあげるわ。」
シン「有難う。頼りにしてるよ。」
そう言うと、ニィは顔を真っ赤にして、うつむいてぼそぼそと小さな声で何かを言っていた。
シン「でも、僕が双剣、ロナがグローブ、ニィがトンファーだとかなり偏ったパーティになるね。」
ニィ「う～んパーティに一人は遠距離支援がいた方がいいって言うけど、大丈夫よ、所詮演習なんだから。」
シン「ニィの言う通りかもね。ま、演習はもうちょい先だし、気楽

に行こうか。じゃなー二人共。」
そう言ってシンは教室から出て行った。

校内雑木林
シンは特に行く当てもなく、雑木林に来ていた。すると、奥の大木が生えている丘の方から透き通るような、心地いい歌声が聞こえてきた。
シン「い～歌声だな。」
シンはまたもや好奇心が働き、丘の方へ行ってみた。
???「～♪～♪」
すると、そこには天使の羽が生えた、女の子が木陰に座って歌を歌っていた。
シン（あの羽は……天使族か！それに、あの制服はここのだ…）
手をまるで懺悔するかのように胸で組んでいるので、リボンが見えず同級生か、上級生かはわからなかったが、ブロンドの髪の毛が時々吹く風に靡いて、女神というのに値するほどの美しさだった。
パキッ
???「誰！？」
シンはいつのまにか、足元を注意せずにただ前方に歩いてしまっていたので、足元にあった小枝に気付かずに、それを踏んでしまい、音を立ててしまったのだ。
シン「いや……その…あまりに歌声がきれいだったから…その…」
シンに気付いた途端に天使族の女の子は自分の横に立てかけてあった、持ち手が白くその先には、真中に青い宝玉が付いている小さい金色の十字架が浮かんでいる杖を自分の前に出し、戦闘態勢に入っていたのだが、シンの姿と制服を見ると戦闘態勢を解き再び木陰に座った。
???「別に気にしていませんよ。」

そう優しく微笑んで言った。
シン「いや、でも本当にすいません。」
腕を今は降ろしているので、わかるがどうやら二年生のようだ。
???「何で、このような場所に?」
シン「ははは…散歩してたんですけど、そしたら綺麗な歌声が聞こえたので、来てみたんですよ。」
セレナ「有難うございます。私の名前はセレナといいます。あなたは?」
シン「僕の名前は、シンです。」
そして、お互いに他愛のない話をして、時を過ごした。ちなみにセレナはシンのことを後輩なのにシン様と呼ぶようになった。

一時間後
ドォゴン!
セレナ「何!?」
ピーンポーンパーンポーン
放送「たった今、校内に数匹のモンスターが侵入しました。校舎内に速やかにお戻りください。」
セレナ「シン様!速く!」
シン「わかってます!」
セレナは杖をとって、校舎の方に駆け出す。国自体にもモンスターが来ないようにシールドを設けているのだが、近年これを無理矢理突破するモンスターも出てきた。人々は魔王の復活が近いからと言っているが、まだ確信はない。何にせよ、校舎や国会など重要な場所にはさらに強いシールドが貼られており、今のところはこのシールドは突破できないらしい。

校長室
校長「国のシールドの強さは変わっていない。ということは、モンスターが強くなっているということじゃなー。強化シールドが破られるのも時間の問題じゃな……」
教頭「そんなー！何とかできないんですか！？」
校長「無理じゃな。そなたに今できることがあるとすれば……」
教頭「何をすれば！？」
校長「生徒の誘導をせよ。そなたは、戦闘科の教師ではないじゃろ？」
パタン
わかりましたの声と共に教頭は、部屋を出た。
校長「あの事が民衆にばれるのも、時間の問題かの？」

雑木林
とにかく二人は、校舎の方へ走っていた。
セレナ「もう少しです！」
雑木林を抜け出しきったと思ったそのとき…
カン！
シン「うわっ！」
シンは上から殺気を感じ、短剣を身構えた。その読みは当たった。
セレナ「大丈夫ですか？こいつらは…スケルトン！」
そう言うセレナ達の前には、二体のスケルトンがいた。
セレナ「おそらく、シールドを破った中級モンスターの手下でしょう。」
シン「くそっ！」
そう言って、シンはホルダーから短剣を出して身構えた。
セレナ「いけませんシン様！シン様はまだ許可書を……」

シン「だからって女の子が一人で戦うのを指をくわえてみている程、僕は落ちぶれていません！」
セレナ「ふぇ！？……わ、わかりました。なら、私が許可します。」
一瞬、セレナの顔が真っ赤になったが、すぐに真剣な顔に戻った。
シン「許可を出しますって？」
普通、許可を出せるのは特別な人だけなのだ。
セレナ「だから！エント学園生徒会長として、１年Ｂ組剣士族のシンにモンスター討伐を許可します！！」
シン「！！！……わかった！セレナさん援護してください！」
セレナ「わかりました！」

戦闘～ＶＳスケルトン×２～
セレナ「シン様！素早さを上げます！スピドナ！」
セレナが呪文を唱え終わり、杖をシンに向けた時、今まさに敵に突っ込んで行ってる、シンの速さが急上昇した。
シン「せいやぁぁぁ！」
いきなりのスピードアップにスケルトンは動揺してしまい、隙ができてしまった。その、隙を狙いシンは一体のスケルトンをおもいっきり蹴り飛ばした。すぐに横にいたスケルトンが剣を振ってきたが、ただでさえ、双剣士は身軽で軽装なのに、素早さを上げると普通の猫人族に劣らないくらいのスピードになり、難なく剣をかわし…
シン「六連疾刃！」
相手を中心に回りながら高速で六回斬った。そうすると、スケルトンは塵になって、土に還った。
セレナ「シン様！危ない！」
え？と振り返った瞬間目の前に、赤い液体が広がっていた。シンにはそれがスケルトンの剣が自分の左肩から背中にかけて斬った時に出た血だとわかった。
シン「ぐぅぅぅ！」

シンは苦痛に顔を歪ませたまま、右手の短剣をアッパーするかのように、スケルトンの頭に下から刺し、ぶっ飛ばしたところに、セレナが放っただろう、サッカーボール程の光の弾が３つ飛んできてスケルトンを土に還した。
セレナ「シン様！大丈夫ですか？今回復を！ヒルナ！」
セレナが回復呪文を唱え杖を傷に向けると、たちまち傷が塞がり、血が消えた。
シン「さすが、天使族凄い！」
天使族は回復や肉体強化に長けている。無論、攻撃もできるが、光属性だけなのだ。
セレナ「すいません。私がいながら、あんな傷を」
シン「別に大丈夫です！それに傷も治してもらいましたし、結果的に無傷だから大丈夫！」
セレナ「でも……」
シン「本当に大丈夫です！それに戦いに傷はつきものですし。」
セレナはまだ納得していなかったが、何か思いつくような、素振りを見せるとにっこりとうれしそうな顔をシンに向け
セレナ「一年生はもう少しで演習でしたよね？私も連れて行ってください♪」
シンは一瞬固まると
シン「へ！？でも、先輩、生徒会長なんですよね？しかも、二年生でしたよね？」
そう言うとセレナは再びにっこりと微笑み
セレナ「生徒会の方は下に任せれますし、演習では、上級生を一人だけパーティーに組めるんですよ？存じませんでしたか？」
シンは存じてないよと心の中で軽く突っ込んだが、先の戦いでは、ナイスサポートだったので感謝した。
シン「では、お願いできますか？」
セレナ「はい♪」

翌日、先生が先輩を一人パーティーに加えてもよいことを必死に謝りながら生徒に報告していなそうな。

第３話：微笑のＡｎｇｅＬ（後書き）

今回の話どうでしたか？本格的っぽい戦闘を入れてみたんですけど……あと、ようやくパソコンが治りました。ガンガン更新できるわけではないですが。少しずつ頑張って更新していきます。今回も書きますが、感想は随時募集です！

第４話：祠の戦い（前書き）

こんにちは（？）ロストです！今回、自分的には本格的な戦いを書いてみました。

第４話：祠の戦い

シンは今、非常に身の危険を感じていた。上級モンスター一万匹ぐらい集まらないとこんな危険な空気にはならないのではないかというぐらいだった。
事の起源はセレナが仲間になり、数週間がたち演習の日になっていた。
アン「は～い！それでは皆さん！決めておいたであろうパーティになってね♪」
先生がそう言うと、みんなぞろぞろと、動きだした。ちなみに試験の内容はダンジョンの奥にある宝箱を守る弱の中ぐらいのガーディアンを倒しその中にある合格の証をとって持ってくればＯＫだ。
アン「それでは、今から作戦ターイム！いくら演習だからって、気を抜くとＧｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌしちゃうからね♪」
何気に怖いセリフに音符をつける先生をとりあえずスルーして、作戦タイムに入る生徒達であった。そんな中、シン達四人も集まっていた。
シン「二人共、この人が前に言ってた、後方支援を担当してくれる先輩のセレナ先輩。で、この二人がクラスメイトです先輩。」
出会った瞬間向き合っているクラスメイト二人と先輩の間に巨大な雷が落ち、三人は悟った
（この人（達）は恋敵だ！）と。そんなこんなで演習の祠に入っていくシン御一行であった。

ダンジョン：演習の祠
祠に入ってからは三人共左右後からピッタリとシンによりつき、時々にっこりとあなたは後衛だから、さっさと後ろに行ったら？等作

戦みたいな事を言っていたが、ただ離れさしたいだけだろう。
しかも、口は笑っているが、目は笑っていずにその雰囲気になかなかモンスターも出て来なかった。出てきた馬鹿は三人の内の誰かに振り向きもせず、音すらも立てずに土に還えされるのであった。当然その中心にいるシンはたまったものじゃない。そして、そんなこんなで、合格の証が入ってある宝箱の前まで来た。
シン「やっと着いた～。疲れた～いろんな意味で。」
ロナ「シン！どうやら一休みさしてくれる気はないみたいだよ。」
宝箱の前にあった魔法陣が光輝き、紫の煙がでてきて、モンスターの形を形成しようとした、正にそのとき
どぉっごぉぉん！！！
突然、天井がくずれ岩と共に何か人型の巨大な何かの手がそのまま煙を押しつぶした。その正体は……
ニィ「ゴーレム！中級モンスターの中でも上位に位置するこいつがなんで！？」そう言ってるまにゴーレムは拳を振り上げていた。
ゴーレム「ゴォォォォォォォ！！！！」
シン「全員、回避だ！」
シンが言い終わるか終わらないかに全員、散らばって、パンチをよけた。セレナ「どうやら、戦うしかないみたいですね。」

戦闘～ＶＳゴーレム～
シン「先輩！肉体強化を！」
セレナ「わかりました！アタクナ！デフェドナ！スピドナ！」
セレナが三つ連続で呪文を唱え、シン達に杖を向けると、シン達の攻撃力、防御力、素早さが上がった。
シン「有難うございます！二人共！僕が相手を攪乱して、隙を作るから、その隙に！」
ロナ「ＯＫ！わかったよシン！」

ニィ「不本意だけど、付き合ってあげる。」
シンはスピードアップしている状態で、ゴーレムを攪乱し始めた。
ゴーレム「ゴォォォォォォォォ！！！」
当然ゴーレムは自分の周りにうるさい蠅が飛んでいるので叩き落とそうとして、腕を振るうが、もともと遅いゴーレムがスピードアップしている双剣士を叩けるはずもなく前に倒れそうになった。その隙を二人が見逃すはずもなく、まずロナがアッパーで相手の胸を少し砕いた。
シン「ニィ！先輩！腕を！」
ニィ「言われなくても！」
セレナ「わかりました！ライトナ！」
ニィがトンファーで、左腕を砕き、セレナの光球が右腕を砕いた。
そして、ゴーレムは全身に亀裂がはいり、
ロナ「はぁぁぁぁ！」
ロナの掛け声と共に振り下ろした拳によって、ゴーレムは砕け散った。
シン「ふぅ～危なかった～」
ロナ「そうだね～いきなりゴーレムが降ってくるなんて、ボクびっくりしちゃたよ。」
そう言いながらちゃっかりシンに抱きつくロナ。ニィ「あぁ～！あんた何ちゃっかり抱きついてるのよ！」
ロナ「何か問題でも？」
ニィ「別に羨ましいとかじゃなくて……その…」
顔を真っ赤にして、目線を下に落とし、時々シンを上目遣いで見ていた。そんな中セレナはゴーレムについて、授業を思い出していた。
セレナ「シン様！他二名！まだ終わってません！」
シン「え！？」
ゴーレム「ゴォォォォォォォォ！」
ゴーレムの目が光り、砕けていた、体の一部が再生していった。
ゴーレム「ゴォォォォォォォォ！」

ゴーレムは三人にむかって平手打ちを繰り出した。
ニィ「はっ！」
ロナ「くぅぅぅ！」
ニィは空中で回転し何事もなかったかのように着地した。ロナは、もともと手の防御は強いので、両手をX字にして平手打ちを防ぎ、後は足腰の強さで持ちこたえた。
シン
「ぐっ！」
シンは背後を取られたので、壁に体をぶつけたがすぐに立った。
ニィ「こいつ、無敵なの？」
セレナ「いいえ。見てください！さっき私が魔法を撃ち込んだ場所だけは洞窟の岩から吸収しています。」
ロナ「そうか！一撃で全てを消せば、あいつを倒せるのか！」
シン「でも、先輩そんなに強い呪文を持ってるんですか？」
セレナ「ええ、持ってます。ですが、強すぎて、後方を全て吹き飛ばしかねないので、宝箱に先に行ってください。」
シン「わかりました！ロナ！ニィ！足止めを任していい？」
ロナ「わかったよ！シン早く行って！」
ニィ「本当に仕方のない男ね。ほら、早く行きなさいよ！」
そして、シンは階段の上にある宝箱のもとへ走った。
シン「これが、宝箱か！？くぅぅぅ！空・け・よ～」
バコン！という音と共に宝箱が開いた。
シン「よ～し！取ったど～！」
セレナ「シン様！他二名！後退してください！」
ニィ「さっきから思ってたんだけど……なんで私がロナと一緒扱いなの！？」
ロナ「そーだ！そーだ！ボク達にもちゃんと名前があるんだ！」
そう言いながら、二人はゴーレムをそれぞれの武器で足を攻撃し転倒させ、シンと共にセレスの後ろに来た。
セレナ「行きます！フォ・ライトナ！」

そう唱えると、まるで、土星のような形をした、巨大な光球がセレナの前に現れた。
セレナ「はぁぁぁぁぁ！」
杖を横に薙ぎ払うと、光球がゴーレムに向かっていき……
ドォッゴゴゴゴゴ！
と全てを一掃した。
シン「す、すげぇ……」
シンはポカンと口を開けたたまま、そう呟いた。
セレナ「これくらい、造作もないですわ。」
セレナは疲れた様子を全く見せず。さも、当然のように微笑んで言った。

数分後…
アン「あなた達ー！大丈……何これ！？」
とりあえず、全然平気だと言っていた、三人を半分以上無理矢理、シンは疲れていると思い休んでいると、爆音と生徒が帰ってこないのを心配したのか、アン先生は教師二人と共にやって来たが現状を見て、驚いていた。そして、先輩兼生徒会長のセレナが事情を先生に話していた。それをいい事に、ロナとニィは疲れていると言いシンに嬉しそうに寄りかかって、座っていた。
セレナ「シンさ……ってあぁー！何してるんですかあなた達！？」
ロナ「何してるのって、ボク疲れちゃって…」
ニィ「私は、ちょうどいい枕がこいつの肩ぐらいしかなくて……し、仕方なくやってるんだからね。」
さらに、何か文句を言おうとするセレンにシンは話をカットさせて、話した。
シン「で、セレナ先輩。先生はなんて？」
セレナ「え？ああー校長先生に直々に話しにいくそうです。」

シン「僕達も？」
セレナ「ええ。そういうことに……」
シン「じゃ、行きましょうか？」
そうして、シン達は学園へと戻った。

校長室
コンコン
校長「はいりたまえ。」
ガチャと扉が開きシン、ロナ、ニィ、セレナそしてアン先生が入って来た。
アン「事情は先ほど電話で話したとおりです。」
校長「ゴーレムが祠を襲撃したことなのじゃが……何か変わったことはなかったか？」
シン「変わったことというのは？」
校長
「何でもいい、何かやばいと感じる空気等でも。」
シン「いえ、特には……なぁみんな？」
ロナ「うん。」
ニィ「ええ。」
セレナ「そうですね。」
校長「そうか…わかった、ではシン君だけ退出してくれ。」
シン「えっ？あっわかりました。」
ガチャリと音を立ててシンが扉を閉じた。そして、何かを話していたがシンの耳には聞こえてこなかった。

第４話：祠の戦い（後書き）

今回の話はどうでしたか？戦闘シーンが、わかりやすく書けていたら、いいのですが……感想はいつでも募集しています。誤字、脱字の報告もよければお願いします。

第5話：実力の違い（前書き）

こんにちは（？）毎度お馴染みロストです！今回も新しい人物がでますが……まぁ見てみてください！

第5話：実力の違い

キーンコーンカーンコーン
シンは無事授業を終え、ある所に来ていた。その場所の名前は裏街道。そのまんま裏の街道なのだが、普通に店頭に並んでる商品から奴隷や怪しい薬まで売ってる。そして、シンが街道に来た理由はある重大な任務が……あるわけではなく、またもや好奇心だった。
シン「いや～流石は裏街道！いろいろ売ってるな～。」
おっちゃん「喧嘩だ！喧嘩！なんと、一人の男が百人以上を相手にするらしいぜ！」
シンがのんびり歩いていると、おっちゃんが街の奥の無駄に超広い場所に向かいながら叫んでいた。
シン「なっ！？１ｖｓ１００！？どんな奴なんだ！？そんな勝負受け入れたのは！」
そう言いながら、シンもオヤジに続いて、広場に走りだした。

広場
カン！バキッ！グサ！
敵Ａ「くらえ！！」
敵Ｂ「ぐはっ！」
シンが広場に着いた頃には、既に勝負は始まっていて、黒いフード付きのローブを着た長身のおそらく男が、自信の体の二倍ぐらいはある巨大な大鎌を振り回していた。既に三十人くらいは倒れていて、鎌の刃にも赤い液体がついていた。しかし、如何せん数が多すぎる、圧倒的に戦力は男の方があるが、数の利はあちらにある。シンはこ

の裏街道の喧嘩にはルールはないが、流石にこれには苛ついていた。
そして…
シン「円月双牙！」
双剣を持って、真ん中にいる男の所に回転して、敵を切りながら向かい、男の後ろに立った。
シン「助太刀するぞ！！」
男は一瞬笑みを浮かべたが、直ぐにもとに戻り。
男「後ろは任せたぞ！」
と一言言うと直ぐに前の相手に切りかかって行った。
敵Ｃ「んだぁ！？てめぇ！その男に肩入れするなら、容赦はしねぇぞ！！！てめぇら！やっちまえ！」
敵の言葉に続いて、他の敵はおー！！と叫んでシンに襲いかかってきた。

戦闘～ＶＳ敵×約３０～
シンは最初に切りかかってきた敵の剣を受け止め、カウンターを決めて、左右から突っ込んできた敵を上にジャンプして、自滅させ、円月双牙で、空中から奇襲をかけた。敵Ｄ「くそ！こいつ強いぞ！」
敵Ｅ「だが、いくら強くても、体力は無限じゃねぇ！！！数の利はこちらにある。持久戦に持ち込めばこっちのものだ！！野郎共！！一気にたたみかけるぞ！！」
敵がそう言うとまた、他の敵がおー！！と言って襲いかかってきた。
シン「くそ！！確かに、持久戦に持ち込められたらこっちがやばい！何とかしないと！！」
残り１０人程度になった時、シンは敵にカウンターを決めたものの、攻撃の衝撃に体が耐えきれず。一瞬、隙ができてしまった。それを

チャンスとばかりに敵が突きの態勢で突っ込んできた。そこで、シンは終わった……と思ったが……
カキン！！聞こえてきたのはシンの肉を裂く音ではなく、金属がぶつかり合う音だった。シンが恐る恐る、目を開けると男が大鎌の刃で敵の剣を受け止めていた。
男「よく、ここまで耐えてくれた。後は任せてくれ。」
そう言うと、男の大鎌の刃に黒い煙みたいな物がまとわり付き、
男「暗黒衝波…」
男が捨て去るように呟き、大鎌を敵に振ると、黒い煙が巨大な刃の形になり、男達に飛んでいき、大爆発した。そして、男がシンの方を向いた時、爆風で、フードが取れていて、銀色の長髪が風になびいていた。顔は整って大人びていて、確実に美男子だった。そして、目の色が赤色…つまり彼は正真正銘の悪魔族である。ちなみに、悪魔族は階級が上のほど瞳の赤色の深さが増していく仕組みになっている。
シン「す、すげぇ…」
男「すまないね。君の実力が、どの程度か見たくなって、出し惜しみしてたんだ。」
シン「えっ！？じゃ最初の３０人くらいは……」
男「ああ…本当の事を言うと、一瞬で決着をつける事もできたんだけど…ほら、直ぐに終わったらつまらないじゃないか。」
シン「そんなぁ～。あっ！！じゃなんで、１ＶＳ１００なんて受けたんですか？」
男「あれは、受けたんじゃなくて、数日前にあいつらのボスを殺したらしくて、その復讐だとか言って襲いかかってきたんだよ。後、遅れたけど名前は？」
そう言うと同時に尻餅をついているシンに手を差し出した。シンはそれを掴み、起き上がると同時に答えた。
シン「シンです。」
キルト「シン君か……覚えておこう。俺の名はキルトだ。また会お

う。」
バサッという音と同時に背中から漆黒の羽が出てきて、キルトは飛び立った。
シン
「キルトさんか……すげぇ強くて、格好いい人（？）だったな。」
そう言うと、シンは裏街道から帰路につくために歩き出した。

後日、キルトが、高校の生徒で、男女共に憧れの的だと知り驚いた、シンであった。

第5話：実力の違い（後書き）

今回の話はどうでしたか？いつもより短めでしたが……今回は女の子ではなく格好いいお兄さんを出しました。シンにも、こんなふうになりたい！という目標が欲しかったので。それと、感想もお待ちしてます！

第６話：明るいＤｅｖｉＬ（前書き）

こんにちは（？）ロストです！今回はなんと、新キャラ＋題名はかわるけど、前編後編になる予定です！

第６話：明るいＤｅｖｉＬ

シン「はぁぁぁ！！」
シンは地面に刺さっている藁人形に向かって技を繰り出した。ここは、シンがセレナと会った、林とは逆にある林の奥の方で、修行場になっている。修行と言っても、ただ地面に刺さっている、藁人形を壊すだけなのだが……それに、この藁人形は、魔力によって再生するのだ。シンは、昨日キルトと言う、凄腕の先輩に会い改めて自分の力の無さを感じた。そして、少しでも強くなれるのなら、という事で誰も使わないような修行の場に来ていたのだ。
シン「円月双刃！」
シュパァンという音と共に藁人形は砕け散ったが、またヴォンと再生した。
シン「はぁはぁはぁ……」
シンは肩で息をしながらその場に座りこんだ。すると、突然上からタオルが降ってきた。シンはそれをキャッチして、辺りを見渡すが誰もいないので首を傾げると、上から声が聞こえてきた。
？？？「いやーなかなかすごかったよ♪修行熱心なんだね♪でも、言っちゃ悪いんだけどこんな所で、人形を切ってるよりクエストを受けてダンジョンとかに行った方がためになるよ♪」
バサッ！　昨日も同じ音を聞いたな、と思いながら上を見上げていると音のすぐ後に視界には黒い翼をはやしたまだ小学生くらいの女の子がこちらに向かって飛び立っていた。
シン「な…に…」
シンが茫然としていると、シンの目の前に降り立った小学生くらいの女の子が笑ってこう言った。
ルルト「私はルルトっていうんだ♪親しみをこめてルルって呼んでね♪良かったら一緒にクエストを受けない？」
目の前の、少女はどうやら、ルルという悪魔族らしい。目の色には

赤色がほとんどないが背中にはキルトのまで巨大とはいわないがそれでもかなりの大きさがある大鎌を背中に背負っていた。大鎌を使うのは大抵悪魔族だし、なにより黒い翼は悪魔族の証である。
シン
「君一年生？」
ルルト
「ちっちっち。人を見かけで判断しちゃいけないよ♪こー見えても私は二年生なんだから。」
シン
「はっ！？嘘…だろ？君みたいな小さな女の子が！？」
ルルト
「だーかーら！人を見かけで判断するな！これが証拠だよ♪」
そう言ってルルトは生徒証を出した。
シン
「えっと……本当だ！二年生って書いてる！」
シンが見た生徒証の学年の欄には二年生と書かれていた。
ルルト
「何度も言うけど、人を見かけで判断しちゃいけないんだよ♪」
シン「すいませんでした。ルルト先輩。」
ルルト「別に気にしてないよ♪よく間違われるし♪それよりも！！敬語は堅苦しいから使用禁止！それとルルって呼んでって言ってるじゃん！」
シン「じゃルル先輩。僕はシンって言います。」
ルルト「知ってるよ。」
シンが自己紹介すると、ルルトはクスッと笑いこう言った。しかし、それは小さすぎて、シンの耳には届かなかった。
シン「何か言いました？」
ルルト「なーんにも♪それより強くなりたいんでしょ♪クエスト受けに行こ♪」
シン「えっ？わっ！引っ張らないでください！」

ルルトはシンの手を掴んで校舎の方に駆け出した。

校舎

ルルト「あ♪ここ♪」

体育館の二階にはクエストを受けるための、超巨大な部屋がある。

まぁ超巨大と言っても、一階と同じ大きさだ。クエストについてはランクがついていて、自分のランクより上のランクのクエストは受けられないようになっている。ちなみに、クエストをこなしていけば、自分のランクは上がっていく。

ルルト「え～と♪シンちゃんはまだレベル1だよね♪」

シン「えと…そうです。すいません。」

ルルト「別にいいよ。許可証とったのつい先日でしょ♪それよりいい加減敬語は止めてよ～。ね！シンちゃん♪」

シン「ははは…考えておきます。あっ！これがクエストを受けるための機械ですよね？」

ルルト「シンちゃん話そらした…」

ルルトは頬を膨らませて拗ねていた。

シン「いや…何というか…すいません。」

シンは何か悪い事をしたのだろうかと疑問を持ちながらも、とりあえず謝っておこうと思い謝ったが。

ルルト「シンちゃん、何で自分が謝ってるか疑問に思ってるでしょ…」

ルルトがジト目で睨んできた。

シン「さぁ！！ルル先輩！！クエスト受けちゃいましょう！！何行きます？どうせならドラゴンでも、一匹どうすか？」

ルルト「ドラゴンて数え方、匹だっけ？」

機械の前で、二人が騒いでいると、シンが良く知っている人が喋りかけてきた。
セレナ「シン様？それに…ルルトさん？一体二人共何を？」
何故か、セレナはいらいらした口調でにっこりと二人に訪ねた。その途端ルルトは小悪魔のような、（悪魔族だが）笑みを浮かべ、シンの腕に自分の腕を組ました。
ルルト「見てわからない？愛し合う二人は、助け合ってクエストをクリアし、さらに愛を深めようとしているんだよ♪セレナちゃん♪」
その瞬間、セレナからブチッという音が聞こえ、殺気が全開になった。これには、辺りの人も震えている。一年に至っては気絶している奴もいた。しかし…
ルルト「いゃん♪シンちゃん助けて♪」
ルルトは全く反省せず、腕にさらに力を入れて、強く抱きついて、セレナをさらに挑発した。
シン「ちょっ！ルル先輩！何してるんすか！？えっと、セレナ先輩僕達クエストを受けなきゃいけないんで、それじゃ！」
シンはそれはもう神のような速さで、クエストを適当に選択し、パーティー編成画面で自分とルルトの生徒証を入れて、登録し、印刷されてきた、クエストの紙をとって、ルルトを抱っこして校門まで、全力疾走した。
ルルト「シンちゃん恥ずかしがりやだね♪」
シン「まったく……もう、二度と人前で腕を組んだりしないでくださいよ。」
ルルト「へぇ～じゃ人前じゃなかったら、腕を組んでもいいんだ！？」
そう言うと、ルルトはぴょんとシンの腕に飛びついた。
シン「は！？そういうことじゃ…」
ルルト「ま～ま～そう言わずに♪ところで何を受けたの？」
シン「は～もういいですよ。え～と遺跡でスケルトンが大量発生しているらしいです。」

ルルト「レベルアップにはもってこいだね♪じゃ行こう♪」
こうして、二人は遺跡へ出発した。

第６話：明るいＤｅｖｉＬ（後書き）

今回の話はどうでしたか？明るい先輩がいるかな～と思ったので……次回については私用がありまして、一週間更新できません。数少ない（いるのか？）読者様申し訳ありません。

第7話：七魔将（前書き）

こんにちは（？）ロストです。今回は敵キャラの幹部的なやつと、自分的にはルルトの結構重要な話になっています。

第7話：七魔将

遺跡

シンとルルトは遺跡に来ていた。

シン「はぁぁぁぁ！」

シンはズバッという音と共にスケルトンの体を真っ二つにした。

ルルト「これで、最後みたいだね♪」

シン「はぁ…はぁ…はぁ…そうですね。」

ルルトが大鎌を背負いながら、シンの所にまで来た。シン達が遺跡に入った時、複数のスケルトンの襲撃にあい、そして今に至るまで大部屋や、細い通路にまで、現れていた。しかも、かなり連携がとれていて、苦労していた。

ルルト「普通、スケルトンはここまで連携はとれないから……優れた統率者がいるってことだね。」

シン「そうですね……ルル先輩！！また来ますよ！」

ルルト「わかってるよ。」

シンは腰から、ルルトは背中からそれぞれの武器を取り出して襲いかかってくるスケルトンと向き合った。

遺跡の通路

シン「かなり奥まで来ましたね。それにしても…」

ルルト「うん。明らかにおかしいよね。」

奥の方に来てから、シン達はスケルトンと全く遭遇しなくなったのだ。そのとき……

ルルト「ひゃ！！シンちゃん……」

シン「どうしたんですか？ルル先輩。」

ルルト「今、何か聞こえなかった？」
そう言われるとシンは周囲に注意をはらうが、敵の気配はしなかった。
シン「何もいないし、聞こえないんですが…」
そのとき、シンとルルトの足元に黒い物体がカサカサという音と共に通り過ぎたそのとき…
ルルト「ひゃぁ～～～！」
ルルトが、涙目になりながらシンに飛びかっかた。シンは突然の衝撃に耐えられず、後ろに倒れた。その間もルルトはシンの胸でわんわん泣いていた。
シン「ちょ！？ルル先輩！くそ！」
シンは黒い物体Gに向かって短剣を投げ殺してから、ルルトの背中をさすっていた。

数時間後
シン「ルル先輩落ち着きましたか？」
ルルト「うん。有難う…あのねシンちゃん聞いてくれる？」
シン「え？あ、はい。」
ルルト「あたしね日頃すごく元気にふるまってるけど本当は泣き虫で、こわがりで、いつも不安で胸がいっぱいなんだよ。それに…」
それから数十分間、ルルトは自分のことをシンに言った。その間シンはただひたすら何を言うわけでもなくルルトの背中をさすりながら話を聞いていた。そして、満足したのか突然立ち上がった。
ルルト「よっと♪ごめんねシンちゃん♪突然泣いちゃって♪」
シン「僕は強いと思いますよ。」
ルルト「へ！？」
ルルトは驚きながら振り返った。
シン「だって、そんなにいろいろ悩みとかがあるのに、元気にふるまえるなんて僕にはとてもじゃないけど、まねできませんよ。」
ルルト「有難う！シンちゃんのおかげで元気になったよ♪」

シン「僕はなにもしてませんよ。」
ルルト「そんなことはないんけど…まいっか！先に進も！」
シン「はい！」

遺跡（王の間）
シンとルルトは遺跡の王が座るような椅子が置いている部屋に来た。
シン「へぇ～もともとは豪華な所だったんだろうな～。」
ルルト「ほらシンちゃん♪離れてたらあぶないよ♪」
ルルトが離れているシンに向かって注意をし、シンが返事をしようとしたとき、爆発音と共に岩が降ってきて離れいたシンとルルトを分断した。
シン「しまった！ルルせ…くっ！」
シンが向こう側にいるルルトが無事か確認しようとしたが、突然出できた数十匹のスケルトンのうちの一体が襲いかかってきて言葉を中断した。

ルルト側
ルルト「シンちゃんと分断されちゃったか。早くあっち側に…行けそうにもないか…」
そう言ってルルトは王の椅子の方向を見ると、黒い魔力が椅子から溢れ出でいた。

？？？「ケケケケケケケケケケ！オイシソウナニオイガスル…」
椅子にピキピキと亀裂が入り、さらに黒い魔力が噴き出た。
？？？「ヒサシブリニ、フウインガトケ、チカクニワオイシソウナコムスメ…ラッキーダゼ」
椅子が完全に砕けきると、そこには外見はスケルトンに似ているが頭には所々錆びている金の王冠、背中には赤いマント、手にはスケルトンが持っている剣ではなく、銃剣を握っていた。そして何よりその膨大な魔力が普通のスケルトンとの格の違いを明らかにしていた。
ルルト「封印されし、魔王軍の七幹部『七魔将』の一体キングスケルトンか…」
キングスケルトン「ケケケ！まだフッカツシタテデホンチョウシデハナイガ、コムスメヒトリヨユウダ！ニガシャシネーーゾ！」
ルルト「安心していいよ…」
そう言いながらルルトは背中の大鎌に手を伸ばし…
ルルト「逃げる気なんてさらさらないから！」
キングスケルトンと向き合い、戦闘態勢になった。

戦闘～VS未覚醒キングスケルトン～
ルルト「はっ！」
ルルトはいきなりダッシュしてキングスケルトンとの距離をゼロにすると、大鎌の持ち手で肋骨を殴り空中に浮かばすと、自分もジャンプして高速の切りを連続で放ち最後に刃の部分に魔力を貯めて切り、キングスケルトンをぶっ飛ばした。

キングスケルトン「ヒャハハハハハハハ！ナカナカヤッテクレルネーオジョウサン！」
キングスケルトンは笑いながら銃剣を構えトリガーを引いた。
カンッカンッカンッ
ルルトは正確に銃弾を大鎌ではじき返しながらキングスケルトンの方へ走った。
ルルト「はぁぁぁ！」
大鎌と銃剣が何度もぶつかり合い、しばらくしてから双方下った。
ルルト「流石に強いね…」
キングスケルトン「ソノツヨイオレサマトゴカクニタタカッテイルノハドコノドイツー？ソレト…ソロソロホンキダセヨ。」
その言葉にルルトは少し微笑むと
ルルト「いいの？手加減しないよ？」
ルルトは自分の目に手を当てると目から黒いカラーコンタクトを取った。
キングスケルトン「コレハ…スバラシ…」
キングスケルトンがセリフを言い終わりそうな時、キングスケルトンの右腕が無くなっていた。そして、その後ろには目がキルトと同じくらい真っ赤なルルトがいた。
キングスケルトン「コレハトンダゴサンダ……ワルイガシヌワケニハイカナイノデナ…」
そう言うと、キングスケルトンはビュンと消えた。それと同時に落ちてきた岩の一つから穴が空きシンが出てきた。
シン「ルル先輩！だいじ……えっとルル先輩ですよね？」
ルルト「えっ！？何言ってるの？わた…」
そこまで言ってルルトは、今自分がカラーコンタクトをしてないことに気付いた。
ルルト「えっと…これは…」
シン「ルル先輩そっちの方が似合ってますよ。」
ルルト「えっそうかな？」

シン「はい。じゃ帰りましょうか。」
ルルト「あの…シンちゃん聞かないの？何で目が赤いか。」
シン「えっ？何か聞いてほしくなさそうだったから…」
それを聞くとルルトは満足そうな顔をしてそっかと言った。

その後、外は真っ暗だったが校舎は明かりが付いていた。校舎まで来てルルトは校長に用があるので着いて来て欲しいと頼んでシンは校長室の前で十分間ぐらい待った後、校長室から出てきたルルトと共に帰宅した。

第7話：七魔将（後書き）

今回の話はどうでしたか？自分的にはキングスケルトンを全部カタカナにするのは読者の皆さんも分かりにくいし、自分もやりにくいから変えようかと思ったんですけど、そこは未覚醒ということで勘弁してください。あと前回も書きましたが、私用で一週間開けてしまい申し訳ありません。最後に感想や注意はいつでも受け付けていますので！

第8話：金という名の戦力（前書き）

こんにちは（？）ロストです！今回も新たなヒロインが登場します。
ついでに、シンの友達（悪友？）も。
では楽しんでください！

第8話：金という名の戦力

カン！キン！
時刻はおよそ深夜二時暗闇の中で刀の刃であるものが光る。一人の人を複数で襲っているらしい、しかし襲われている人物は中々の強豪らしく次々と敵を倒しているが既に肩で息をしていた。
???「はぁ…はぁ…負ける訳には…」
追跡者「もらった！」
???「しまっ…」
バコンッと鈍い音と共に、襲われていた人が明かりで照らされている路地に落ち、それを追跡者たちが囲んでいた。襲われていた人物はその体格からして、少女だと思われる。
追跡者A「はぁ…はぁ…この餓鬼！手間を取らせやがって。」
追跡者B「まぁ待て、気持は分かるがな…」
追跡者A「ちっ！運べ！」
追跡者の一味が少女を抱きかかえると、ピュッという音と共に闇に消えた。

キーンコーンカーンコーン
シン「はぁ～終わった終わった。」
ロナ「疲れたね～」
ロナが目を擦りながらシンに話しかけてきた。
シン「いや、お前は寝てただろ？」
ロナ「甘いねシン！寝ていても、体力は使うんだよ！」
シン「お前、充電したから無駄に元気だな。」
ニィ「ええ。鬱陶しいぐらいに。」

ロナ「ええ～それはひどいよニィ！」
三人でワイワイやってると、こちらの席に向かって男がやって来た。
シン「よ！孝太！」
孝太「おす！おいシン。この後空いてるか？」
この孝太という男は剣士族で、なかなか気さくでつるみやすい奴だ。
クラスのムードメーカ的な奴でもある。
シン「ん？空いてるのは空いてるんだが、それが？」
孝太「そうか！だったら、いいもの見してやるよ！一回荷物を置きに帰ったら速攻で校門の前な！それから、お前一人で来いよ！金も忘れるなよ！」
シン「は？あ……ちょっ待てよ！」
シンが返事を返していないのに、孝太はダッシュで帰って行った。
シン「全く…」
シンはため息を、しながらカバンを背負って二人に別れを告げて出て行った。

校門前
シン「遅いぞったく。」
孝太「悪い悪い…その代わりにすげーもん見せるからさっ！」
シン「本当だろうな？」
孝太「ああ。あっやべっ急ぐぞ！」
時計を見て孝太は走りだした。
シン「遅れたのは、お前のせいだろうが…」
そう言ってシンも遅れて、走り出した。

裏街道
シン「何で裏街道何だ。」
孝太「まぁついて来ればわかるって。」
そう言い合いながら、走っていると巨大なホールが見えてきた。そして、そのホールの屋根には…
シン「奴隷オークション！？」
孝太「そ！さぁ行くぞ！席が無くなる！」
シン「あ…あぁ…」
そして、中に入り席を見つけて座っていると、ブザーが鳴り…
放送「それでは、只今からオークションを開始します！」
シンはくだらないと思って聞いていたが最後の少女を見た時、その少女は美少女で、髪の毛はうすいピンクで、無表情だったそして、どこか寂しそうだった。その少女はシンと目が合うと助けてという、エールを送ってきているように見えた。シンも何となくこの子を守らなければと思い、手を上げた。そして、貴族っぽい人と戦い、勝った。そして、その金額は１００万であった。

受け取り口
シンと孝太は、奴隷を受け取る窓口に来ていた。
シン「わざわざごめんな…僕こういうの初めてだったからさ…」
孝太「いいってことよ！連れてきたのは俺だしな。しかし、お前金もすごかったけど、口調が完全にマジギレだったぞ。あの奴隷の子と知り合いか？それとも、貴族っぽい奴に恨みでも？」

シン「金の方は、クエストの奴を欲しいものとか、無かったからもしもの時のために貯めていたし、貴族っぽい奴は見たこともないし、あの女の子とも初対面だよ。」
孝太「じゃ何であんな大金出したんだよ？」
シン「何か、あの子を守らなきゃって思ったんだよな……初対面なのに…」
孝太「ふ～ん。でも、時々あるらしいぜ。そういうの…」
シン「そうなんだ…あっ来た！」
孝太「じゃ、俺はお邪魔そうだから帰るぜ！」
シン「ああ。いろいろ有難う。」
孝太「後、この事は学校の連中には秘密にしといた方がいいぜ。じゃな！」
シン「？？じゃな。」
？？？「お待たせしました。」
シン「ああ…えっと名前は？僕はシンだけど…」
鈴「鈴と申します。貴方のことはなんとお呼びしたら、よいのでしょうか。」
鈴は名前と同じで、鈴のような声だった。そして今来ている着物も抜群に似合っていた。
シン「鈴……さんの好きなように、呼んでくれたらいいよ。」
鈴「鈴で構いません。年も私の方が下でしょうし。」
シン「じゃ……鈴。」
鈴「それから、私はマスターとお呼びしても？」
シン「一向に構わないよ。じゃ、そろそろ帰ろうか、鈴。」
鈴「はい。」
その時、シンは今まで無表情だった鈴が一瞬笑ったような気がした。

第8話：金という名の戦力（後書き）

今回の話はどうでしたか？楽しんでいただけたのなら嬉しいです。

第9話：押しかけ！？

今日は日曜日、学校は休みなので寝て体力を回復させる者、友と出かける者、一人で鍛錬を積む者、百人いれば百通りの過ごし方がある休日。そんな中シンは……

シン「えっと……やることは…もう特にないや…休んでくれてていいよ。」

鈴「そうですか…では」

そういうと鈴はシンが与えた自室に戻って行った。

シン「でも、掃除の仕方も綺麗で手際もいいな。」

シンは帰ってくると、まず鈴に今日は疲れただろうから休めと言って部屋を与え、休ました。

だが、次の日シンが起きると鈴はすでに起きていて、掃除やら、洗濯やらをやっていた。そんなこんなで昼になると、仕事は無くなっていた。

シン「さてと…僕も特にすることはないし…ん？電話か。」

シンは電話の通話ボタンを押し、耳にあてた。

シン「もしも……」

ロナ「もしもーし！！！ボクだよ！ロナだよ！」

受話器からは、ロナの声が大音量で聞こえた。

シン「はいはい。わかったから、大声出さないで。」

ロナ「今から遊びに行っていい？いいよね！有難う！」

シン「へ？ちょ、ちょっと待て！」

ロナ「ああ、大丈夫！場所はわかってるから！じゃねー！」

プチっプープープー…

シン「あいつ……人の返答も聞かずに…」

数時間後……

ロナ「あっそびに来たぞー！」
チャイムをうざいほど押しまくり、鍵を開けるとドアを突き破るほどの勢いで開いた。ちなみに、シンはナイスな反射神経＋時の偶然で紙一重で避けていた。
ロナ「あれ？何でそんな格好で玄関にいるの？」
シン「あのなぁ…おま…ん？」
シンはロナに説教しようとしたが、途中でロナの後ろに人影が見えたので、一時中断した。
ルルト「やっほー！シンちゃん！お邪魔しまーす！」
すると、ロナの後ろから元気よくルルトが飛び出してきた。
セレナ「こら！もうちょっと礼儀というものを……」
ルルト「大丈夫、大丈夫！そこはシンちゃんだから許してくれるよ！」
ルルトはセレナが叱りつけようとしても、馬耳東風、どこ吹く風で反省のはの字も見せようとしない。
ニィ「そうそう。ルルトの言う通りよ。所詮シンの家なんだから。」
シン「僕の家どうこうは、どうでもよくないけどとりあえず置いといて、ニィ、先輩にタメ語で話すなよ…」
ニィ「あら？それなら許可はもらってるわよ。」
ルルト「だって、堅苦しいの嫌いだし……」
シン「相変わらずですね……」
ロナ「くんくん……」
セレナ「あら？どかしたの？ロナさん。」
ロナ「ねぇシン？」
ロナがにっこりと笑いながら、しかしどこか殺気を出しながらシンに聞いた。
シン「え？ど、どうした？」
ロナ「この家に人を呼んだことは？」
シン「え？大工の人とか以外は特に……」
ロナ「そうだよね。新築だもんね♪」

ニィ「そう言えば、どことなく流れてくるこの匂い……女？」
その、瞬間シンはびくっとなった。
シン「な、何を言ってるんだよ…ハハハハハ…」
セレナ「シン様……目が泳いでますよ？」
とりあえずシンがその場をやりすごそうとした瞬間…
鈴「マスターどうかしましたか？」
そのとき、シンは（鈴…お前がＫＹのナンバーワンだ）と思った。

リビング（地獄化）
ニィ「で？シン君はあいつに連れられて、奴隷のオークションを見に行って…競り落としたと…」
ロナ「へぇーー？シン君はそんなに女の子に困ってたんだ？」
セレナ「そうねぇ…いくらシン君がお年頃だからといって、まさか奴隷とは…」
ルルト「ふーん。シン君はそういう娘とそういうシチュエーションが好きなんだー。」
全員あえて普段通りの呼び方で呼ばず、名前＋君で精神面でシンを少しずつシンをいたぶっていた。
シン「いや…そんな…そんなやましい感情で鈴を買ったんじゃないよ…」
ニィ「どうかしらねぇー」
シン「信じてくれよー！」
ロナ「じゃーさ！今日からここに住ましてくれたらいいよ！」
シン「へ？」
ルルト「あ！それ名案！」
シン「な、何を…」
ニィ「大丈夫よ。こっちもただで住ましてもらおうなんて考えちゃ

ないわよ。」
シン「いや…だから…」
セレナ「ええ。炊事、洗濯、家事、起床まで…何でもやります！」
シン「はぁ…どーせ何言っても何が何でも、ここに住む気なんでしょ…」
一同「「「「うん！」」」」
シン「ただし、条件がいくつかある。」
ロナ「何々？」
シン「一つ目は絶対に喧嘩しないこと。」
ルルト「もちろん！」
セレナ「無意味な争いは嫌いですし…」
シン「そして、二つ目…ていうか、これで最後なんだけど…」
ニィ「あら？以外に少ないのね？」
シン「ああ。後は常識的な範囲で守ってくれたらいいよ。で、二つ目は今日一回帰って両親からＯＫをもらうこと。」
ロナ「わかった！行ってくる！」
ドドドドドと壁と扉をつき破るかのような勢いで、ロナは出て行った。
ニィ「じゃ私も行くわね。」
ニィは窓から猫の特性を生かして、華麗に飛び降りて行った。
ルルト「ボクも行くよ！まったねーシンちゃん！」
セレナ「では、楽しみにしててください。」
二人は窓から飛んで出て行った。
シン「せめて、玄関から出てってくれよ……」

数時間後（とは言っても一時間弱）
まだ、誰も帰ってきてなくリビングにはシンと鈴の二人だけだった。

鈴「マスター、お茶です。」
シン「ああ、有難う。しかし、悪いね。」
鈴「??お茶の事ですか?」
シン「ちがうちがう。騒がしくなっちゃったねってこと。」
鈴「そのことでしたら構いません。マスターの決定ですから。」
シン「別に嫌だったら言っていいんだよ。僕の決定は神の決定って訳じゃないんだし。」
鈴「変わっていませんね。」
シン「へ?なんか言った?」
鈴「いいえ!何も!では……」
シンが鈴の声が聞こえなく、聞きなおそうとしたら、鈴は急いで出て行った。
シン「何だったんだ?」

ピンポンピンポンピンポーン
シン「だから、連打するなっての!ゲームじゃないんだぞ。」
シンは昼のラッキーは続かないだろうと思い、傘の持ち手を器用に利用して鍵を開けた。
セレナ「お邪魔します……あら?」
ルルト「シンちゃん何やってんの?」
だが、予想に反して扉が開いて、初めに見えたのはセレナとルルトだった。そして、その後ろには…
ロナ「ただいまー!」
ニィ「許可、もらってきたわよ。」
残りの二人もいた。四人ともさっきとは違うのは大荷物をもっているということだった。家具などは、後で宅配便やらが持ってきてくれるらしい。
シンはこれからにぎやかでうるさくなるだろうなと思っていた。

第9話：押しかけ！？（後書き）

更新が1カ月も遅れてしまい、申し訳ありません。学年が新しくなり今年から受験生なのであまり時間がとれませんでした。これからも、更新が遅れるかもしれませんが、これからもよろしくお願いします。

第１０話：水の魔将

某所、某時刻
岩に囲まれた部屋に二つの棺桶があった。どうやら、どこかの遺跡の一室のようだ。その棺桶には、魔王の呪いの封印札が貼ってあるが、今にも破れそうだった。そして、時折がたがたと音を立てて揺れていた……

ブォォォォォン
バイクの走る音が草原に響いた。その、バイクは黒がメインで所々に黄色と赤色が入っていた。さらに、そのバイクにはタイヤがなく地面から浮いていた。
シン「もう少しかい？鈴」
鈴「ええ、マスター。」
そのバイクには、シンと鈴の二人が乗っていた。どうして、こうゆう事になったかというと……それは、約一日遡ることに……

リビング
鈴とみんなが、仲良くなりみんなでご飯を食べているときだった。
ロナ「ねぇ鈴！鈴！」
鈴「はい、な……」
ロナ「鈴も学校行きたくないの？」
シン「せめて、最後まで返答さしてやれよ。」
鈴「私は、この身分ですから。」

シン「僕は別にかまわないんだよ。それに、許可さえあれば、どんな身分でも学校には、入学できるし、普通に過ごせるだろ。」
鈴「ですが……」
セレナ「いいんじゃないですか？もしも、何か言われても私たちが全力で守りますよ。」
ルルト「それに、鈴ちゃんが入ったら学園生活がさらにおもしろくなりそうだし。」
ニィ「そうそう。だから、あなたは行きたかったら行きたいって言えばいいんだし。面倒なら断って良し！ということよ。」
鈴「私が……学校に……？」
セレナ「もちろん。」
鈴「行き…たいです。」
ルルト「よっしゃ！決まりだね！」

そして、編入試験の内容が遺跡調査だった。ただし、条件は鈴を入れてパーティは二人だけということだった。
シン「あ！見えてきた。あれか？」
鈴「そうみたいですね。」
見えてきた、遺跡は塔のように細長くなっており、海に面していて傾いてるので、まるでしずんでるようだった。
鈴「シータワーと呼ばれてるようですね。」
シン「まるで、観光地の大目玉のような名前だな。」
鈴「それだったら、どれだけ良かった事かと思いますね。」
二人は気楽に話しながらシータワーに入って行った。

シータワー
タワーには、マーマンが時々出てくる程度で特に苦はなかった。
シン「もう少しで最上階だな。」

鈴「そうですね。ですが、最後まで油断は禁物ですマスター。」
シン「わかってる。」
バコン
シン「何！？」
シン達が階段を上ろうとした時、突然塔が揺れ、シンの横の壁から水が出てきた。
鈴「マス……くっ！」
どうみても、魔物が起こしたとしか思えない水圧がシンを襲い、床がくずれシンは下に落ちて行った。鈴は追おうとしたが自分の足場を注意していなく、鈴もその場に落ちてしまった。

シータワー地下
シン「いたたた……どこだここ？」
シンが落ちた場所は円形の部屋の半分に海水が浸水しており、もう半分は浸水されてなく、扉があった。そして、シンは運よく水の方に落ちたのだ。
シン「いやー。あっちの方に落ちてたら人生グッバイだったな。」
そう言っておよぎながら、シンは陸地を目指した。
シン「よっと、とりあえず進むか。しかし、上で見た時は塔のようになっていて上がり下がりしかできないと思っていたのに、地下はドーム状になっていてその中にいくつも円形の部屋があるのか。」
シンが扉を開けると、そこは研究施設のようになっていた。
シン「なんだこれは？」
シンは適当に、手元にあった資料らしき紙を手に取った。
シン「チェンジ・オブ・ザ・ウエポンプラン？」
シンは紙に書いていた題名を読み上げた。しかし、特に読んでも意味がわかるはずもなく元あった場所に紙をおき、次の扉を開けた。

そこには、大人一人入るくらいの大きさのカプセルが無数に並んでいた。
シン「ほんとになんなんだよ、ここは。」
ゴゴゴゴゴゴ
シンが歩いていると、突然揺れだし、巨大な龍の顔が壁を突き破って出てきた。
龍「こんな所で、まだ生きているとはな」
シン「なんだよお前は！？」
リヴァイアサン「我が名はリヴァイアサン。七魔将の一角、水の化身だ。」
シン「何かよくわからないけど、もしかして僕をここまで落としたのはあんたか？」
リヴァイアサン「よくわかったな。いかにもそなたに水流をぶつけここまで、落としたのは我だ。」
シン「何か、個人的に恨みでもあるのかよ？ていうか、鈴はどうした！？」
リヴァイアサン「貴様に個人的な恨みがあるわけではないが、少し諸事情があってな。それと、鈴だったか？あの小娘も落ちていったぞ。もしかすると、もういないかもなぁ…」
シン「だったら、話は早い！」
リヴァイアサン「何をするつもりだ？」
シン「お前を倒して、鈴を探し出すまでだ！うぉぉぉぉ！」
シンは双剣を構えて、リヴァイアサンに向かって走り出した。

シンがリヴァイアサンに向かって走り出した時、遺跡の中にある二つの棺桶が点滅しだしものすごい力で揺れていた。

第１０話：水の魔将（後書き）

長らく空けてしまって待っていただいていた方々は申し訳ありません。しかも、文章量も短く…。
また、更新が遅くなるかもしれませんが、待っていただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9519f/

学園伝

2010年12月25日14時19分発行